

「求む新鮮力―道内大学アメフト部の新勧作戦」⑥北海道科学大

先輩の力も借りて

札幌市手稲区の北海道科学大。食堂などが入るE棟前の広場ではヨサコイサークルがにぎやかに振り付けの練習をしていた。アメリカンフットボール部の新人勧誘担当の藤川拓斗君（2年）にはうらやましい光景だ。E棟内のラウンジで今年の新入生勧誘作戦を尋ねると、「大学院に進んだ先輩にも勧誘を手伝っていただいている。最低でも選手5人を」と、OBも交えての総力戦に期待を込めた。

前身の北海道工業大時代の1988年に創部し、98年には1部準優勝の実績を誇るが、2013年からは2部暮らしが続く北海道科学大アメフト部。近年は部員不足に苦しみながらの戦いが続いている。選手14人で臨んだ昨秋の道学生選手権も決勝で東京農業大に力負けした。そして先輩6人が抜けた今年のチームは4年生3人、3年生1人、2年生4人の選手8人。スタッフはゼロになった。まずは試合ができる人数を確保したいと、5人の獲得目標になった。

作戦はビラ配りから始まった。コロナ禍で去年はできなかったが、今年は「広場に立つのは1クラブ2人まで」という制約はあるが、新入生との接触が解禁された。チームのエンブレムと練習時間を記し、「見に来てください」と書いたボードも持ち、昼休みに新入生が集まる正面入り口付近や食堂前に部員が見学を呼びかけた。ツイッターの情報発信も忘れない。7日から体育館で週4回の練習見学会をスタートすると、多い日には14人の新入生が訪れるなど反応は上々。筋トレやフラグフットボールも行って懸命にアメフトの魅力をPRした。その見学会で助っ人を買って出たのが、去年の主将の広島樹君。大学院に進んだ広島君は、見学会場で新入生たちに練習メニューの狙いなどを説明し、競技のおもしろさも紹介した。「気さくに話しかけるところが、新入生を引き付けている」と先輩の巧みな話術に感心する藤川君。現役とOBの熱意が届き、選手1人と女子マネジャー2人が入部を決めた。

グラウンドを使って21日に開いたフラグフット体験会。3人の新入部員と、体験会参加が2回目という新入生も参加し、楯円球を見事にキャッチして先輩たちから褒めあげられた。千葉悠太主将（3年）の母校・岩見沢西高の野球部の後輩になる川島大和君（1年）は新しいスポーツに挑戦したかった。アメフトは楽しく、やりがいも感じた」とやる気十分だ。2人の1年生マネジャーも忙しい。大学院生の広島君はマネジャーの先生役も務める。藤川君は「僕たちが教えられないマネジャーのノウハウも、面倒を見てもらっています」と感謝しきりだ。そして「入部を検討している新入生がまだ数人いる」と目標達成へ期待を膨らませた。

